

## 男鹿地域の地質研修に参加して

岡崎 紀 康

私達は、去る平成4年6月12～13日にかけて社内地質巡検として男鹿半島を訪れた。我々は、東北地方を対象として地質コンサルタントに従事しているが、男鹿半島はその地質解釈の原点であり大変意義のあるものであった。

男鹿半島では、基盤のアダメロ岩および赤島層から新第三紀最上位の脇本層までを見学した。各地層毎に時代に沿って見学する予定であったが何分時間に余裕がなかったこともあり、飛々の急ぎ足の見学となった。

私は男鹿半島の地質を見るのは始めてであり、各露头それぞれに興味深く熱心に？観察した。その中で最も印象深く思えたのは基盤であるアダメロ岩と門前層の枕状溶岩である。それぞれについての地質概要と感じたことを以下に記載したいと思う。

入動崎付近には基盤であるアダメロ岩およびそれを不整合に覆い赤島層が分布している。基盤岩として位置付けられてきたアダメロ岩は、岩盤中に異質岩片が多く混入していることが確認され、二次的な堆積（崖錐性・崩積性によるもの）により形成

されたのではないかと新しい見解もある。実際露頭を見学すると①アダメロ岩中にアダメロ岩自体が円礫状に取り込まれている。②礫状に異質岩片が混入している。③風化が進行しどこにも新鮮岩盤が認められない。以上より上記の事が裏付けられるとも思えるが混入している礫が円礫である場合が比較的多く認められ、納得し難い面もあった。

また、象の鼻と言われる門前層中の枕状溶岩を観察した。門前層は陸成層と考えられているが、観察した枕状溶岩には水成層の薄層が挟在しており、門前層は海進・海退を繰り返し受けた、浅い海などの堆積環境が考えられる。

我々はこうした地質を相手にして仕事をさせてもらっている。対象の地質が陸成なのか？水成なのか？また、先第三紀の地層なのか？新第三紀の地層なのか？によっては、地質に対する考え方がまるっきり変わってくる。

私達が仕事をする際、このような情報に関しては、既往の文献に委ねることが多い。しかし、男鹿の地質に対する見解が変貌し

ているように地質に対する考え方、つまり時代・形成環境に関しては、詳細な研究成果により定説が覆される可能性を持っている。通常、科学とは実験を繰り返し結果が同一になるものと考えるが、地質学（地球科学的立場）は実験による研究が困難であり自分の目でみた情報をできるだけ多く集め、地史を探り、それを未来につなげるものである。

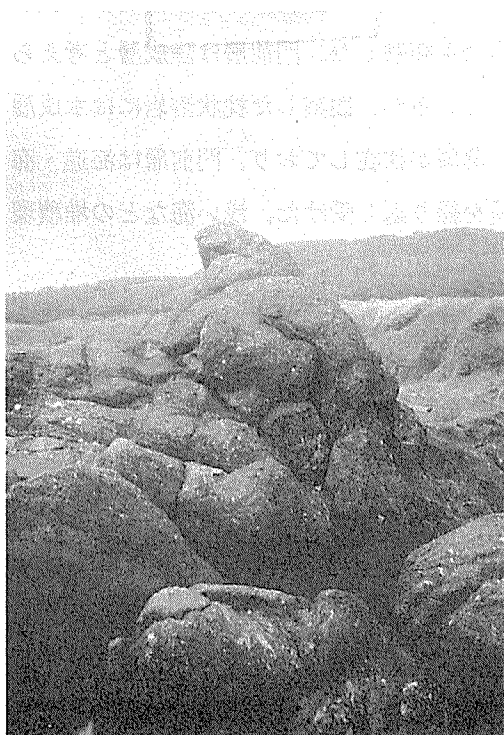
地質に従事している人間に必要なものは、あらゆる情報に対応できる己の柔軟な頭と古い概念を打ち破る勇氣、そして確かな目、山を駆け回るかもしれないような足であると感じている（ほらを吹く口も必要な時があ

る）。

以上、今回の巡検で感じたことを思いつくまま記載したが、楽しく山を歩いて美味しいものを食べて、地酒に舌ずつみを打ち、ちょっと悩むくらいが地質屋としてちょうど良いと私は思っている。

仕事に夢中な技術者のお父さん、観光ついでに奥さん・息子を引き連れ男鹿に行って、聞きかじりの地史で千万年前の昔を語って聞かせてみてはどうでしょうか。

私も機会を見つけて大事な大事なハンマーと共に再度、男鹿半島を訪れたいと思っている。その時、左手には愛する人の手を握っていることでしょう。

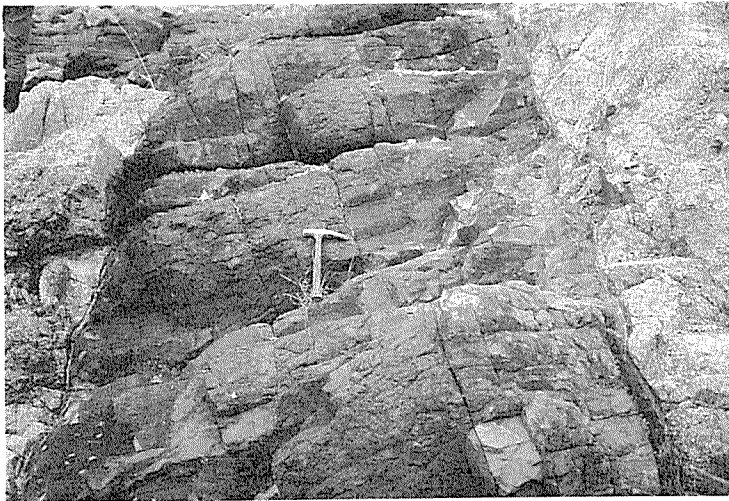


館山崎のかやぶき岩の枕状溶岩。象の鼻に良く似ており溶岩吹き出し口と推定される。溶岩の流れた方向が顕著に観察できる。



入動崎に露岩するアダメロ岩。

- ① アダメロ岩自体が円礫状に取り込まれている。
  - ② 異質岩片が混入している。
- などの様子が観察できる。



アダメロ岩を貫き分布する粗粒玄武岩。

(株)復建技術コンサルタント)